

丸岡藩騒動記 作造の仇討 第二部

駆け引き (1) (P15~20)

丸岡城は五角形の内堀うちほりに囲まれた小高い丘の曲輪くるわ（城郭じょうかく）のなかにある。大手門を抜けると藩士が詰め、執務をする二の丸御殿がある。そこから坂を登ると政務をおこなう表本丸(政庁。表御殿)と藩主の居住地区の裏本丸がある。これが本丸御殿、その横に天守閣がある。本丸御殿と天守閣を含めて本丸という。内堀の外側は三の丸とよばれ、この区域に上級武士の屋敷が曲輪を防御するように囲む。三の丸の武家屋敷の外周を川が流れる、これが外堀の役割を果たす。

本多織部の屋敷は曲輪の南側を防御するように配され、外堀を抜ければ町屋が並び、人の往来が盛んである。太田又八の屋敷は曲輪西側の防御を担い、その先は寺院が集まり寺町となっている。

又八が本多織部の屋敷を訪ねたのは正月明けの一月八日であった。応対にでたのは織部の嫡男、宗一郎であった。この十九歳の若者すこぶる評判が悪い。学問も武芸も人より劣るのだが、家柄を笠に着てやたらと横柄な態度をとる。同年輩のみならず年上の家臣に対してもそうであるから家中で嫌われていた。

家老の又八には、さすがに無礼はなかったが、応対の慇懃無礼な言葉使いあなどに侮りが感じられる。(家老と大きな顔をしているが、親父の代までは高々七十人扶持の少身ではないか) とでも思っているのであろう。

又八は意に介せず、
「織部殿に折入って話をござる。御取次願いたい」とだけ言った。
「主人は来客中で、すぐにはお逢いできかねます。お急ぎの用なればお話を伺いお伝えします」又八の高飛車な言いようにムツとした表情をみせながら応えた。(この成り上がり者が、俄か家老の分際で図に乗りおって)
織部一派は又八の出自を軽蔑し、俄か家老と陰口を叩いていた。

「客人とは寺田内蔵之丞くらのじょう殿と由村勘解由よしむらかげゆ殿でござるか、ならばお二方同席の上で話しをしたい」

宗一郎の顔色が蒼白になった。得体の知れぬ恐怖が全身を貫く。寺田と由村が織部によばれたことは本人以外誰も知らぬ。此処に来るのも悟られぬよう屋敷

からではなく、別々の町屋から町駕籠^{まちかご}を仕立てたから誰にも、(それは又八の手の者を指すのだが) 気づかれなかった筈である。だが、此の男は知っていた。宗一郎は動揺し、返答に詰まる。又八は若者が小心者であることを見抜いた。こういう手合いは一喝するに限る。又八は言葉を強めた。

「このような寒いところにいつまで立たせておくのじゃ。又八が来たと主人に伝えるのじゃ。早うせい！」

「直ぐにお伝えいたします」慌てて宗一郎は一礼し、奥座敷に向かった。息子の知らせに織部は背筋が凍る思いだった。(奴は我等の行動を逐一見張っておる) だが動揺した姿を寺田や由村に見せてはならぬ。見せれば彼等は離れる。門前払いもできるが、臆したととられよう。虚勢を張った。

「通せ」叱りつけるような口調である。

「我等はいかがしましょう」寺田が訊く。

「いまさら身を隠してもしょうがあるまい。そこにおれ！」と声を荒げた。又八の来訪の目的が掴めず、苛立っている。

「お邪魔したようですな。だが火急の用ゆえ容赦ください」又八は奥座敷に入るなり口を開いた。彼は笑っている。(気に食わぬ。唐突な来訪を詫びるのが筋であろう。なぜ奴は笑う、儂^{わし}を小馬鹿にしおって)

「寺田、由村と久しぶりに酒を酌み交わそうとしていたのだ。貴公を呼んだ覚えはない。無礼であろう、早々に退散されい」

「急を要する用でな」又八は意に介さない。

「当方に用はない。政務に係わることなら明日城中で伺おう。お主の顔を見ていると酒が不味くなる」

「酒が不味くなるか、成程な。だが酒の美味い不味いでは済まんぞ。城中に持ち込めばお主の立場が無くなると思うてな。親切心で参ったのだ。話がすめば直ぐ帰る」

又八の自信ありげな態度に織部は怯^{ひる}んだ。(こ奴何かを掴^{つか}んでおる、脅しにきたのか) 彼にとって後ろめたいことは一つや二つではすまない。暴かれれば己の立場が危うくなりかねないこともある。現に一派の中には目付の糾弾により職を解かれた者もいる。奉行も一派の探索を続けており、情報は逐一又八に伝

えられている。目付の林伊右衛門も奉行の奥平半左衛門も又八の一味、彼の指示で動いていると織部は見ている。

それだけに謀りごとには細心の注意を払ってきたつもりである。今日、寺田と由村をよんだのも密議を凝らす為であった。今日の会合は誰にも洩れていない筈である。

密議の内容は三国遊郭に絡む利権である。北前船寄港地の三国には上新町に遊郭があるのだが、手狭なことと港から離れていることが難点であった。楼主たちは新たな遊郭の場所を探していた。適地として九頭竜川に面し、港に近い滝谷出村があげられた。

滝谷出村に二軒三軒と遊郭ができると、好立地もあって繁盛した。出村は新興遊郭地として注目され、進出をもくろむ商人たちが名乗りをあげた。多くは上新町の楼主、福井の商人たちであった。だが問題があった。三国が福井藩と丸岡藩に分割されていることだった。

上新町は福井藩領、滝谷出村は丸岡藩領である。上新町の楼主が出村に遊郭を移そうにも、福井の商人が新たに設けようにも丸岡藩が認めなければ叶わない。

彼等は丸岡藩への伝手を探していた。その噂を聞きつけた由村が織部に伝えた。繁盛した遊郭の揚りは莫大である。その一部が上納されれば藩は潤う。出村遊郭に家中の異論があるはずがない。とすれば誰が仲介の労をとるかである。上納金には表と裏があり、裏金が仲介者に渡る。この利権を手中に収める為の会合で、酒を飲みながら密談を交わすという段取りだった。

(そのことを聞きつけて乗り込んで来たか。まさか……。それはあり得ない、まだ我等は動いてはいないのだ。では、何の為に……)

「用むきを伺おう」織部は冷静を装った。

「此処二年の不作で領内に餓死者が出ているのは御存じか」

「それがどうした。餓死者が出ているのは我が藩だけではない。他藩にも出ている。そんなことにいちいち構っておれるか」

「そう言うては身も蓋もあるまい。だがな、諸藩では貧民に施^{ほどこし}米をおこなつ

ておる。我が藩でも倣^{なら}おうと思うのだ。そこでお主の力を借りにきた」

(こんなつまらぬことで乗り込んできたのか。余計な心配をしたものよ)
又八の来訪の目的がわかると、織部は急に威勢がよくなった。

「そんな話は城中でもできるわ。だが、助力などはせぬ。だいいち藩にその余裕はない。考えてもみよ、餓死する者は老人や病人の働けぬ輩よ、何の役にも立たぬ。早う成仏するが人の為、世の為、藩の為。放置すればよいのだ。そんなつまらぬ話を持ち込むな、迷惑だ！」

「酷い話だ。身を粉にして働いてきた老人を見捨てろと言うか、病人は早く死ねと言うのか。だが、窮するは老人や病人だけではない。百姓の困り様は尋常ではない。食がなく種粃を食べ尽くした者もおる。餓死する者には子供もおる。百姓することもできぬ、子供さえ餓死するようでは村を見限る百姓も出てこよう。領民の逃散は藩の一大事。防ぐ手立てを尽くすのが家老として務めだ。儂もお主もな」

「繰り返すが百姓にくれてやる米なぞ藩にはないわ。それほどやりたければお主が工面すればよい。そうせい、ならば反対はせぬ」織部はそう言うと高笑いした。(こ奴の善人ぶりが気に食わぬ。できるか又八、できねば余計なことは言うな)

又八も大いに笑った。

「成程お主の言いようも尤^{もつと}もだ。では儂が二百俵を工面する。お主も二百俵を工面せい」

「馬鹿も休み々言え。なぜ儂が工面せねばならぬ。やりたければ一人でやれ」

「そうはいかぬ。お主には是非とも二百俵を出して貰わねばならぬ」

「又八、気が狂ったか！」織部は怒鳴った。

「狂いはせぬ。お主、一本^{いっぽんでん}田の藤右衛門^{とうえもん}を知っておろう。長^{のうね}畝の弥五郎を知っておろう」又八の口から飛び出した名前に織部は顔面が蒼白になった。

「いずれも名主、大地主だ。先年その者たちに苗字帯刀が許された。もちろん

知っておろうな、なにせお主の口利きだからな」

「……」織部は言葉を発することができない。

又八は寺田、由村に目をやった。

「寺田、由村、お主らも存じておろうな」二人は俯いたままである。

「その者たちは米百俵を献上したゆえ苗字帯刀を与える、そう申したのは織部殿、お主だった」

「……」真冬だというのに織部の額に汗が浮かぶ。

「その者たちの屋敷から約定書が出てきてな、それによれば米二百俵献上の際には苗字帯刀が許されると記されている。不思議であろう。藤右衛門、弥五郎ともに二百俵、合わせて四百俵を献上している。藩には二百俵しか入っておらぬ。二百俵はどこに消えたのであろうか。お主心当たりがござらぬか」

重苦しい空気がその場を包んだ。織部は沈黙したままである。寺田、由村は顔を伏せながらも時折、又八、織部の顔を窺がっている。

又八は鋭い視線を織部に向けている。耐えきれなくなった織部が口を開いた。

「又八殿、どうすればよいのだ」先ほどまでの傲慢な態度は陰を潜めている。

「そうよな、内々に済ませるには、どうすれば良いか……」

又八、存外役者である。と、手を叩いた。

「易きこと。藤右衛門、弥五郎、其々施米百俵寄進があつたとすればよい。^{つじつま}辻褄があうだろう」

「わかった、そうする。又八殿、此の事はお主一人の胸に納めてくれ、頼む」

「その心算^{つもり}でここにきたのよ。さて儂の方だが、さすがに二百俵を工面するには骨が折れる。ところでお主、上新町の楼主たちや福井の商人たちが滝谷出村に廓^{もくろ}を造ろうとおるのは御存じか」又八は意味ありげに笑っている。

「知らぬ、そのような話は初耳だ」織部は白^{しろ}を切った。

「そうか、それならそれでよい。儂は結構なことだと思ふ。あの辺り一帯が賑わえば良い、揚りの一部も藩に入ろう。悪くはない。まあ許すとして、米二百俵を施米として供出させることを約束させるのよ。それが儂の工面だ、知っておいてくれ」

「邪魔はせぬ」そうは言ったものの腸^{はらわた}が煮えくりかえる思いである。

「もう一つある」相変わらず笑っている。

「まだあるのか」苦虫を噛み潰したような表情である。

「種籾が不足しておる。これはこれで別な手立てを講じねばならぬ。種籾を手に入れる為に銭が必要だ。商人、地主から借りねばならぬ。だが利子が高くては返せぬ、返せねば田畑が取り上げられる。これは避けたい。そこでだ、当分の間、借米に係わる貸金の利息は二割以下と定める。利息が低いことを理由に

貸渋ってはならぬ。そのための定書^{さだめがき}を出す。これなら百姓たちも高利に苦しむこともなからう。これも知っておいてくれ」

「分かった」否応もない。逆らうことはできない。

「話はこれだけだ。邪魔したな、後はゆっくり飲んでくれ」又人が席を立った。

又人が退席し襖が閉められたとき、

「くそ！」と奇声を発し、織部は脇息^{きょうそく}（肘掛）を襖に向かって投げつけた。